

コメニウスの教科書と汎知学の展開

井ノ口 淳 三

Comenius's Textbook and the Development of Pansophia

Junzo INOKUCHI

はじめに

1992年に生誕400年を迎えたコメニウス（Comenius, Jan Amos Komenský 1592-1670）の生涯は、ヨーロッパ中を巻き込んだ30年戦争（1618-1648）とまったく重なっている。30年戦争以前のボヘミア王位継承戦争や、以後のスウェーデン—ポーランド間の戦争およびイギリス—オランダ間の海戦などを含めると、コメニウスの生涯は、まさに戦火におおわれたものであった。彼は愛する妻子を失い、大切な原稿も焼き尽くされ、宗教上の抑圧を受けて生涯の大半を亡命生活ですごさねばならなかった。1628年に彼がポーランドへ亡命した時には15万人の同胞が行動を共にしたと言われる。¹⁾失意の彼は祖国の将来への憂慮にとらわれたが、やがてそれは次代を担う青少年へ再建を託するという希望となって彼を支えた。しかし、それまでのように一部の少数の者だけが教育を受けるのではこの希望は実現できないと彼は考えた。なぜなら、当時の学識ある人々、すなわち宗教者、学者、裁判官、為政者といった人々や富裕な商人、軍人などは、いずれも自分の利益を優先し、墮落しているように思えたからである。

そこで彼は「すべての人にすべてのことを」教授するという壮大な計画をたて、教育を通して社会を改革しようとした。そのための普遍的な方法として提唱したのが「教授学」である。したがって、コメニウスの「教授学」は、狭義の教授の技法にとどまるものではない。さらに彼は、人間が知識を得ることの意義や目的をも視野にいれて考察したが、知識そのもののあるべき姿に関心を抱いた。これへの志向が「汎知学 Pansohia」と呼ばれるものである。

この「教授学」と「汎知学」とはコメニウスの思想において密接に関連したものであるから、両者の相互関係を前提として彼の思想を理解することが今日のコメニウス研究の共通した立脚点となっている。本稿では、コメニウスの執筆した教科書を分析することを通して、その内容の変化と「汎知学」の展開とのかかわりについて考察する。教科書は一般に「教授学」の枠組

の中では主たる教材として考えられるけれども、コメニウスの「汎知学」を教育内容として単純に理解することはできない。なぜなら「汎知学」の中に諸学問の一分野としての「教授学」が含まれるという関係も考えられるからである。つまりコメニウスの教科書は、「教授学」と「汎知学」とが交差する接点に位置するものであり、それを分析することは、彼の言う「すべてのこと」の内実や、それと「汎知学」との関係を理解する上で有益であると考えられるのである。

I. 『言語の扉』の二つの側面

コメニウスがその名をヨーロッパに知られるようになったきっかけは、『言語の扉』(1631年)の出版によるものである。コメニウスの評価は、「近代教育学の創始者」とみる教育学の立場からだけではなく、哲学、言語学、神学など様々な分野において行われている²⁾。しかし、晩年に一世を風靡した『世界図絵』(1658年)に至るまで、教科書執筆者としての評判は、終生衰えることはなかったし、死後も数世紀にわたって各国で使用された教科書と共にその名は記憶されているのである。

コメニウスが最初に好評を博した『言語の扉』は、刊行当時からラテン語学習用の教科書とみなされ、使用されてきた³⁾。しかし、1959年のチェルヴェンカ(J. Červenka, 1903-1988)の研究以降は、これを単なる言語学習用の教科書としてではなく、汎知学系列の著作として受けとめる見方がむしろ主流となっている⁴⁾。けれどもこの著作を改めて検討してみると、それが言語教科書として果たした役割の大きさを再評価しない訳にはいかない。さてコメニウス自身の意図はどのようなものであったのだろうか。

『言語の扉』の序文は、従来の言語とりわけラテン語教授法の問題点を批判するところから始まっている。すなわち、今日まで言語を教授する真正な方法は、学校において十分には認識されていなかった。学芸に一生を捧げた多くの者は、言語の周辺だけにいて老いてしまい、ラテン語だけに10年以上の歳月を、いや一生を費やして衰えたが、その苦勞に報いる成果はなかった(第1節)。ヴィヴェス(J. L. Vives, 1492-1540)、エラスムス(D. Erasmus, 1466-1536)などもそのことを嘆いたが、欠陥を根本的に取り除く治療法は表明されなかった(第2節)。青少年は、事物を抜きにして語彙だけを詰め込まれた(第4節)。言葉は事物の記号であり、事物を知らなければ言葉は何を意味づけることになるのか(第5節)と、彼は問いかける。

この第5節には、コメニウスの事物主義の考えがよく示されている。だが他方で「言葉で言えない事物を理解している者は、もの言わぬ彫像といったいどんな違いがあるのか」(第21節)と述べて、事物の理解に対応した言語表現の豊かさを求めている。つまり『言語の扉』においてコメニウスは、言語と事物の学習が並行して進まなければならないことを主張しているので

ある。したがって彼は、言語の知識と同時に多様な事物の知識を獲得できるキケロ (M. T. Cicero, 106–43 B.C.) やホラチウス (Q. Horatius, 65–8 B.C.) などの著作が教材として適当か否かを吟味するのである (第6節)。その結果、これらを経費や内容の点で実情に合わないとして退ける (第7節–第10節)。

コメニウスが求めているのは語彙と文章がいかに多くても短期間にわずかな労力でこれを把握でき、容易に愉快に着実に学べるように全体をまとめることである (第11節)。そのようにラテン語全体を一つにまとめたのが、スペインのサルマンカにあるヒベルヌス教団というジェスイットの手によるラテン語教科書、その名も同様の『言語の扉』(1615年)にほかならない。この著作もヨーロッパの各国語に翻訳され普及しており、コメニウスも熱心に読みふけていた (第12節–第14節)。コメニウスの『言語の扉』は、実はこの著作に示唆を得て執筆されたものである。しかし、ジェスイットの教科書は、第一に語彙が日常使用されているものではない、第二に語彙が同形多義語や同音異義語でさえ1回ずつしか使われていない、そして第三に語彙が本来の意味ではなく転喩的に使用されている、などの理由からコメニウスには初心者向きの教科書ではないと感じられた。(第16節–第18節)。

そこで彼は教科書を執筆するにあたって次の工夫を盛り込むのである。すなわち、理解力と言語とは常に対応して進むようにさせるという教授学の不動の法則から、全事物界を子どもの受容力に応じて一定の学年ごとに配分し、言語で描きだされるべきもの (つまり事物そのもの) を刻みつけるようにすることである。彼は100個の表題にそれをまとめた。次に彼は、比較的頻繁に使用される語彙を8000個選び、1000の文章にまとめたものを作成した。その文章も最初は短く1音節だけの語彙で、後には長く多音節のもので形成すること、語彙は本来の意味で使用すること、同義語や反意語は近くに並べて置くこと、母国語 (チェコ語) をラテン語に対応させて両方の言語を理解できるようにすることなど、言語教科書として実に細かい配慮をはらっている。(第21節–第27節)。

さらに、辞典と文法書の必要性について述べ (第28節–第30節)、最後にこの著作の表題について次のように記している。すなわち、私はこの小品の表題を『言語の扉』とだけするよりも『言語と学問の苗床』とつけようとした。なぜなら、ここではさまざまな事物と話法とに等しい配慮がなされているからである (第31節)。

以上『言語の扉』の序文の内容を順を追って見てきたが、この著作が言語教科書として細やかな配慮のなされた著作であることを認めないわけにはいかない。最後の表題をめぐるいきさつも、従来『言語の扉』が単なる言語の教科書ではないことの証拠の一つとしてあげられてきたものであるが、この著作を執筆した時期のコメニウスにとっては、事物学習と言語学習とはあくまで同時平行的に進行するものであり、両者は同列の重みをもっていたのではないかとと思われる。『言語の扉』への新たな視界を広げたチェルヴェンカの提起は貴重であるが、それを

もっぱら事物の教育を重視した教科書であるとみなすことはコメニウスの本意ではあるまい。なぜなら、コメニウスは『言語の扉』を執筆した後に『事物の扉』と題する著作の構想を練り⁵⁾それに着手したからである。

II. 汎知学の二つの概念

画期的なラテン語教科書の執筆者として有名になったコメニウスは、ヨーロッパ諸国の汎知主義者達からも注目されるところとなった。コメニウスの教科書に示された事物の網羅的な性格の側面が、彼らの関心を集めたのである。『言語の扉』およびその入門編として作成された『言語の扉の前庭』(1633年)は、いずれも自然、人間、社会のあらゆる事象を取り上げており、それらはコメニウスの構想した体系の中に位置づけられている。その内容は彼の言う「すべてのこと」の一端を連想させるものである。

コメニウスは、学生時代にドイツに留学した際、恩師のアルシュテット (H. J. Alsted, 1588-1638) の下で百科全書編さんの仕事を手伝ったことがあり、それを通して大きな影響を受けたことは否定できない。また、『言語の扉』においてコメニウスは、ラテン語の初学者が日常使用している範囲の語彙を選択するという工夫をしているが、そのことによって彼らの身近な生活を対象とした題材を取り入れる結果となった。つまり言語の教科書とはいえ、その文章は文法上の判断からだけではなく、内容の選択とも密接に関連して作成されざるをえなくなるのである。そこで彼は、人間に関するあらゆる事柄を題材として教科書を作成した結果、事物についても学べる教科書が出来上がったのである。

しかし、コメニウスの真意は、ばらばらの知識をよせ集めてたくさん暗記させることではけっしてなく、むしろその反対であった。「私たちがなにか、あらゆる人にあらゆる知識・技術の(とりわけ完全無欠な)習得を要求しているとお考えになってはいけません」とコメニウスが注意を促しているところをみれば、彼自身そのような誤解の生じる危険性を予期していたのかもしれない。彼は続けて言う。「申すまでもなく、そんなことは本来なんの役にも立たないのですし、また私たち人間の一生の短さを考えれば誰にもできはしないのです。ご承知のとおり、どんな技術にしても一つの技術のひろがり、間口も大変に広ければ、奥行も大変に深いのであります(例えば、自然学、算術、幾何学、天文学などがそうです。まして農耕や植樹の技術などは、なおさらのことです)」。つまりここでコメニウスが求めているのは、「すべての人が、現世と来世とで出会う重要な事柄のすべてについて、その基礎・根拠・目的をはっきりつかむこと」にほかならない。⁶⁾

『言語の扉』を執筆した1630年代前半の時期には、コメニウスの汎知学は、まだ百科全書主義の影響を残している。しかし、それが当時の百科全書と区別されるのは、その系統性と諸事

物の連関への配慮、および一貫した体系的秩序にある。彼は個々の知識の集積と結合だけが問題なのではなく、世界の全体像を把握する新しい視点が重要なのだと言う。コメニウスによれば、これまでの学問は、それぞれの領域に独自の問題や素材や結論を集成することだけに従事してきたが、それでは何ものへも導かない。世界像はそれらの統一的組織的秩序において理解すべきである。そうして初めて、世界像は生き生きした現実と一致し、大きな広がりの中で把握できるのである。そのように把握された「普遍的知恵」は、それらの構成要素が多様であって、共通の規則の統一によって結合される。それによって事物はその真の意味を、そして現実はその存在の核心を現わすのである。⁷⁾

コメニウスにこのような把握を促したのは、イギリスの汎知主義者達との交流によるところが大きい。⁸⁾ 1641年9月にコメニウスがロンドンに渡った時、サミュエル・ハートリブ (S. Hartlib, 1600頃-1662)、ジョン・デュアリ (J. Dury, 1596-1680)、ヨアヒム・ヒュープナー (J. Hübner-Fundanius, 1610頃-1680) らが彼を迎えたと伝えられる。コメニウスの汎知学の主張は、1630年代後半から確かに変化しはじめた。そのことは、『光の道』(1642年執筆、1668年刊行)における次の記述が示している。コメニウスは、その中で「汎知学 Pansophia」と並んで「汎歴史 Panhistoria」および「汎理論 Pandogmatia」という概念を新たに提起しているのである。

この『光の道』という著作は、コメニウスが教育改革を通して社会の改革をめざす姿勢を明確にしたとみられるものであるが、その後半の部分で彼は「あらゆることが、あらゆる人に、あらゆる面にわたって理解される」普遍的な「光の道」を指し示そうとする(第14章)。そして普遍的光の四つの必要条件として、「普遍的書物、普遍的学校、普遍的協会、普遍的言語」をあげている(第15章)。続く第16章ではまず「普遍的書物の根拠と方法」について説明するのであるが、その中で「汎知学」とは区別された「汎歴史」および「汎理論」という概念が登場するのである。

すなわち、「汎知学」とは、賢明になりたいと思うあらゆる人に必要なあらゆる事物が含まれるものであるが、しかしそれは、あらゆる事物についての一定の規則のまとまりのようなものである。この書物には人間が現世と来世で知り、信じ、行い、望むのに必要なあらゆることが説明されているが、事実の関心に厳格な秩序を保ち、正しく配列されている。この書物の目的は、人間を学者にすることではなくて、人間に自分自身とあらゆることの目的、その目的への手段とその手段の正しい利用を理解させることである。

これに対して「汎歴史」は、事物の個々の知識(自然・技術・倫理・政治・宗教などいずれの領域においても)が、普遍的な知恵を明瞭にするという考えで貫かれているものであり、特殊なものから一般的なものへ正しく進行する際の事例と事例の集積である。ここではすでに「汎知学」において一般的な形態や観念で記述されたあらゆる事物を見ることができる。自然の形態

と物質の形態、技術と自然、法と慣習、人間の予見と出来事の実際の結果、神の知恵と人間の愚かさ、正義と強情との間で起こる闘争がこの舞台で演じられる。また、市民生活と教会生活の領域での人間に関する事柄の記録も報告されている。この書物は、真の完全な「汎知学」を築く土台となるものであり、些細なことや不確実なことは不必要である。

さらに「汎理論」は、あることについての理論や見解、真理に関する言明への注釈を概観するもので、学問を目指す人には有用である。これまでに何千もの著者がいるので、そのすべてを集めるのは人間の力の範囲を越える。そこでこの概要や目録を作成し、3種類の索引をつけ加える。それは、①アルファベット順の著者名、②著者の国と言語、③アルファベット順または汎知学の順序に主題や内容を示すものである。

以上の三者の関係については、「汎知学」が探究すべきものを「汎歴史」に示し、「汎歴史」は「汎知学」を正道に戻し、「汎理論」は両者に様々な事物のより良い観察をすすめるとされている。⁹⁾

このように『光の道』において「汎知学」は限定的に用いられ、従来より狭くて抽象化された概念として考えられているという変化がみられる。そこから太田光一氏は、「汎知学とは内容的には『言語の扉』ではなく『事物の扉』と重なってくるように思われる。……「汎知学」では事物の一般的な原型 (idea)・観念 (notio) が示されるのに対して「汎歴史」は個別の事物の個々の行動・偶有性・問題のその起源から現在までの、個別から一般への前進の過程の集積である。「汎理論」は、これまでに提出された様々な理論・学説の概要である。……コメニウスのこのような説明を見ると、「汎歴史」につながるのが『言語の扉』であり、『事物の扉』の方が「汎知学」につながると判断できよう」と述べている。¹⁰⁾そこで次にこの指摘について検討することにしたい。

Ⅲ. 二つの側面と二つの概念との関係

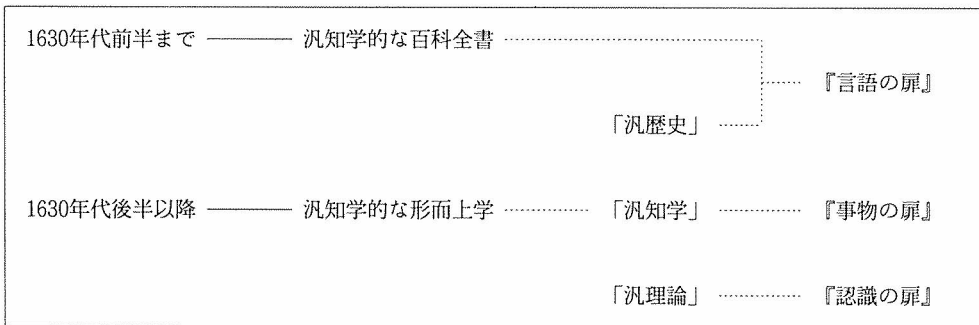
これまでⅠ節では、コメニウスの『言語の扉』が言語と事物を共に平行して学習できる教科書であることを説明し、語彙への配慮と事物を網羅する性格という二つの側面のあることを指摘した。そしてⅡ節では、彼の「汎知学」には、1630年代前半までの百科全書の影響の濃い構想と1630年代後半以降に見られる抽象化された説明という二つの概念が見られることを述べた。Ⅲ節ではこれらの関係について考察する。

すでにチェルヴェンカは、コメニウスの汎知学の概念について *existentia* と *essentia* という用語によってそれを区別するという考えを示していた。¹¹⁾ それによれば *existentia* とは、事物を現実の存在の中で説明し、百科全書の特別な種類である汎知学的な百科全書 (*eine pansophische Enzyklopädie*) に発展させるという考え方である。これに対して *essentia* とは、

事物をその本質において普遍的な理念の形で説明するものであり、形而上学の特別な種類である汎知学的な形而上学（eine pansophische Metaphysik）という考えと結びつくものであるとされる。そして前者と『言語の扉』、後者と『事物の扉』とがそれぞれ関連していると述べている。

またチャプコヴァーは、「汎知学」と『事物の扉』、「汎歴史」と『言語の扉』とがそれぞれ関連性を持つと記し、さらにコメニウスが「汎理論」¹²⁾に対応して『認識の扉』と題する著作を用意していたことを紹介している。

さてここで以上の諸説を図式的に整理してみると次のようになる。



それではコメニウスのこの構想は、その後どのように展開していくのであろうか。それについて考察する手がかりとして『事物の扉』および全7部から成る晩年の大作『人間の事柄の改善に関する総審議』が残されている。

まず『事物の扉』についてであるが、この著作は題名から想像されるような諸事物の具体的な説明といったような内容はまったく含まれていない。そればかりか題名に添えて「世間一般には形而上学と呼ばれている」ということわり書きがみられる。ただしコメニウスの言う「形而上学」は伝統的な概念とは異なり、他のあらゆる学問の方法論の出発点として用いられている。彼は、あらゆる学問を、全体と部分、理論と実践、一般と特殊の結合としてとらえ、観念の領域と現実の世界とを結びつけて理解するのである。それではなぜ『事物の扉』という題をつけたのか。コメニウスによれば、それはやはり『言語の扉』と対応するものだからである。両書とも事物と言葉という共通の素材を取扱うのであるが、「『言語の扉』は事物に導かれて言葉の真の理解を探究し、『事物の扉』はすでに理解された言葉の助けを借りて事物そのものを、事物の内臓とも言うべきものをむき出しにする所まで奥深く探り出しているのである」¹⁴⁾。

『事物の扉』は30年間にわたって20回以上も構想を練り直されたものであると伝えられ、コメニウスの著作の中でも難解なものである。彼は最後までこの著作の充実に努めたことも

あって、死後の1681年によりやく刊行された。それゆえこの書物には晩年の思想が凝縮されている。結局のところ『事物の扉』に示された「汎知学」とは、事物の具体的な現象ではなく、その本質を探る普遍的抽象的な内容であった。

次に、『人間の事柄の改善に関する総審議』の第3部である『汎知学』について検討する。結論から言えば、この著作では「汎歴史」や「汎理論」という表現は用いられておらず、『光の道』で述べられた内容をさらに純度を高めて「汎知学」という主題に凝縮したという傾向がうかがえる。そこでは事物と思考の関係について「無、一部、すべて」という枠組を用いて論じられる箇所が出てくるが、これは『事物の扉』と共通するものである。このように『汎知学』においては理念の世界についての記述など全体的には抽象度の高いものである。しかし、「実質の世界」について述べた第5章では、大地、空気、水、鉱物、植物、動物、人間など『言語の扉』の配列を連想させる内容も見られる。その意味では「汎歴史」という概念で説明していた部分をその内容の中に取り込んでいるとも考えられるのである。いずれにせよ、量や数の多数による混乱を戒めていることは、コメニウスの一貫した傾向である。この考えは彼の教科書にも反映している。¹⁵⁾

またこの『人間の事柄の改善に関する総審議』の巻末には『汎知学事典』が付けられており、その中の「汎知学 Pansophia」という項目には、次のような説明がなされている。

「汎知学とは、普遍的知恵のことである。すなわち、存在しているあらゆる事物の知識、あらゆる事物が存在している方法に従い、あらゆる事物がそのために存在している目的と使用のための知識である。

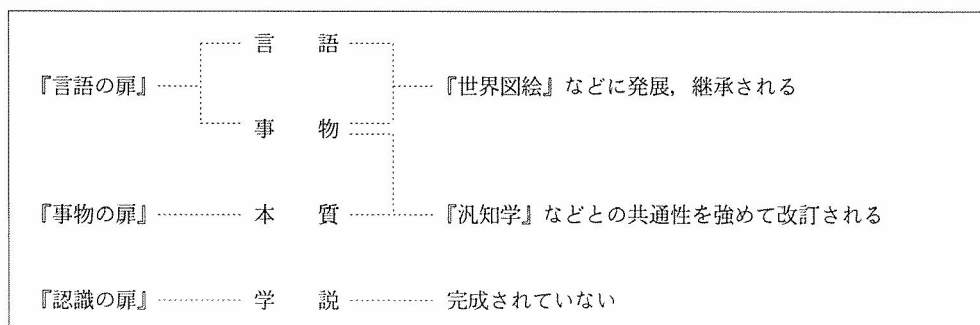
そこで三つのことが必要である。つまり人間が、1. あらゆることをその本質に従って知ること。2. 本質をその形態に従って認識すること。3. 最後に、あらゆることをその目的に従って使用を明確に示すこと（以下略）。¹⁶⁾

この項目の説明をみれば、コメニウスはやはり事物の本質の認識を重視しており、個々の事物には際限がないとしていることがわかる。ここで注意したいのは、「無限である知識は私たち有限な人間には与えられていない」とコメニウスがことわっていることである。これは、かつて『コメニウスの意図の序幕』（1637年）と題する著作がコメニウスに無断で出版された際、「あらゆる人にあらゆることを」教授するという彼の主張が、神を冒瀆するものであるという批判を受けたこととおそらく無関係ではないように思われる。¹⁷⁾

さらに彼は、汎知学が人間に教えることとして、①人間は些細なことを見習うべきではないこと、②人間は事物を考察する時に不確かなことに動揺すべきではないこと、③人間は事物を中途半端に見るべきではないことをあげ、この「汎知学」の項目の説明を終えている。

お わ り に

Ⅲ節で見てきたように、『事物の扉』、『汎知学』、『汎知学事典』など汎知学に関するコメニウスの晩年の著作のいずれにおいても、彼は汎知学を狭義のものとして、つまり「汎知学的形而上学」としてとらえる主張を貫いている。『汎知学』には『言語の扉』に示されたような具体的な事物の説明という内容も一部に見られるものの、基本的には『事物の扉』との共通性が強い。『言語の扉』の教科書としての役割は、その後挿し絵入りのより親しみやすく実用的な教科書である『世界図絵』に発展し、継承されていく。また、『認識の扉』の構想は、結局実現されなかった。したがって、Ⅲ節に示した図式はその後次のような系譜を形づくることになった。



コメニウスの教科書と汎知学との関連は複雑な要素を含むものであり、コメニウス自身の理解も彼の置かれたその時々時代の政治的、社会的、宗教的背景の中で揺れ動いている。シャラー (K. Schaller) は、コメニウス生誕 400 年を記念して出版されたフリットナー (A. Flitner) によるドイツ語訳『大教授学』第 7 版 (1992 年) のあとがきとして「コメニウス研究の現状によせて」と題する一文を寄せ、その中で次のように述べている。¹⁹⁾「『大教授学』をもはや学校や教授組織の教授学的で方法的な諸規則の有益な集成としてではなくて、それをコメニウスの汎知学的な全体計画の文脈と枠組の中で研究せざるをえないようにするというのである」。つまりシャラーは、これまでコメニウスの「教授学」系列の代表的著作として理解されてきた『大教授学』をも汎知学の視点から分析することの重要性を指摘し、それを「改革的で汎知学的な全体構想におけるコメニウスの後期の教育学的な見解」の示された著作とあわせて読むようにすすめているのである。これが『大教授学』の「あとがき」として書かれたものであることは、まことに興味深いものがある。

チェルヴェンカやシャラーは、コメニウスの教科書および教授学系列の著作をも彼の汎知学の全体的枠組の中で考察することを求めているが、その枠組それ自身が固定したものではなく、発展しているものである。それがいかなる動機に基づいてなされたものであるのかについては、今後なお彼の多くの教科書の分析を通して探究されねばならない。

注

- 1) 大鷹節子『チェコとスロバキア』サイマル出版会、1992年、37ページ。
- 2) 藤田輝夫「J. A. コメンスキー教授学における『新』の概念」『教育学研究』第57巻第2号、日本教育学会、1990年、42ページ。
- 3) Jiří Beneš-Martin Steiner; Die Janua lingvarum reserata 1631-1657. In: *Acta Comeniana* 6, 1985.
Gerhard Michel; Rezeption und Wirkung der Medientheorie des Comenius und seiner Schulbücher im 17. und 18. Jahrhundert. In: *Mitteilungsblatt* Nr. 23 der Comeniusforschungsstelle. 1990.
Ivana Čornejová; The Jesuit School and John Amos Comenius. In: *Homage to J. A. Comenius*. 1991. など。
- 4) Jaromír Červenka; Dva typy Komenského Dveří jazyků a různá jejich zpracování. In: *Acta Comeniana* XVIII, 1959.
- 5) 拙稿「コメニウスの教科書観」藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』法律文化社、1992年を参照されたい。
- 6) 『大教授学』第10章第1節。
- 7) Miroš V. Kratochvíl; Comenius, 1984. S. 106.
- 8) この間の経緯については、次の論文が詳しい。太田光一「コメニウスの教育思想の発展とイギリス訪問」『日本の教育史学』第31号、教育史学会、1988年。
- 9) 『光の道』第16章。なお、『光の道』に関して次の学位論文の中で詳しく論じられている。貴島正秋「コメニウス教育学」『芦屋大学論叢別冊』、1992年。また、「汎歴史」についてはチャプコヴァー (D. Čapková) による次の一連の研究がある。
The Idea of Panhistoria in the Development of Comenius' Work Toward Consultatio. In: *Acta Comeniana* 2 (XXVI), 1970.
Some Comments on the Interrelation between Comenius's Concept of History and His Concept of Education. In: *Acta Comeniana* 3 (XXVII), 1972.
- 10) 太田光一「コメニウスの哲学思想」前掲『コメニウスの教育思想』、172ページ。
- 11) Jaromír Červenka; Einige Bemerkungen zur Comenius' Metaphysik. In: *Acta Comeniana* 3 (XXVII), 1972.
- 12) D. Čapková; op. cit. 1970.
D. Čapková; The Educational Plans of J. A. Comenius in 1646: from a diary sent to English colleagues. In: *History of Education* Vol. 2, No. 2. 1978.
- 13) D. Čapková; op. cit. 1978.
- 14) 『事物の扉』序文。
- 15) 『汎知学』『可能な世界』第2章～第3章。『事物の扉』第6章～第9章。

- 16) 拙稿「コメニウスの教科書における精選の原理」『文部省科学研究費補助金研究成果報告書』総合研究 (A) 研究代表者太田光一, 1993 年。
- 17) 『汎知学事典』。太田光一「普遍的知恵への志向——J. A. コメニウスのパンソフィア」『会津短期大学研究年報』第 48 号, 1991 年参照。
- 18) 当時の各方面からの反響については, D. Čapková; The Reception Given to the Prodomus pansophiae, and the Methodology of Comenius. In: *Acta Comeniana* 7, 1987. に詳しく紹介されている。
- 19) Klaus Schaller; Zum gegenwärtigen Stand der Comeniusforschung. In: *Große Didaktik*, übers. und hrsg. von Andreas Flitner. 7. Aufl., 1992.

引用文献

本稿で言及したコメニウスの著作は, チェコおよびスロバキア科学アカデミーから現在刊行中の全集 JOHANNIS AMOS COMENII OPERA OMNIA (JACOO), および DE RERUM HUMANARUM EMENDATIONE CONSULTATIO CATHOLICA (1966) を使用した。引用に際しては, 章・節の番号を示した。なお翻訳 (*印) を参照したが, 訳文は必ずしもその通りではないことをおことわりする。

- 『言語の扉』 JACOO 15¹ Janua linguarum reserata. 1631.
* 藤田輝夫訳『開かれた言語の扉』(私家版) 1991.
* The Gate of the Latine Tongue Unloed. 1656 London. (これは第二版型である)
- 『事物の扉』 JACOO 18 Janua rerum reserata. 1681.
* Erwin Schadel: Pforte der Dinge. 1989 Hamburg.
* 藤田輝夫訳『事物の扉』(私家版) 1989.
- 『大教授学』 JACOO 15¹ Didactica magna. 1657.
* Hans Ahrbeck: Grosse Didaktik. 1961 Berlin.
* 鈴木秀勇訳『大教授学』明治図書, 1962.
- 『光の道』 JACOO 14 Via lucis vestigata et vestiganda. 1668.
* E. T. Campagnac: The Way of Light. 1938 Liverpool.
* 太田光一訳『光の道』(私家版, 抄訳) 1989.
- 『人間の事柄の改善に関する総審議』第 3 部『汎知学』Pansophia.
* Obecná porada o nápravě věcí lidských. 1992 Praha.
* Franz Hofmann: Allgemeine Beratung über die Verbesserung der menschlichen Dinge. 1970 Berlin (抄訳).
- 『汎知学事典』Lexicon reale pansophicum.
* Franz Hofmann: op. cit.
- 『世界図絵』 JACOO 17 Orbis sensualium pictus. 1658.
* 井ノ口淳三訳『世界図絵』ミネルヴァ書房, 1988.

本稿は, 1991 (平成 3) 年度および 1992 (平成 4) 年度に文部省科学研究費補助金 (一般研究 C 課題番号 03610142) の助成を受けて行われた研究成果の一部である。